

初夏の空で笑う女

小川未明

青空文庫

あるところに、踊^{おど}ることの好^すきな娘^{むすめ}がありました。家^{いえ}のうちにいてはもとよりのこと、外^{そと}へ出て、草^{くさ}の葉^はが風^{かぜ}に吹^ふかれて動^{うご}くのを見^みては、自分^{じぶん}もそれと調^{ちようし}子を合^あわせて、手^てや足を動^{あしうご}かしたり、体^{からだ}をしなやかに曲^まげるのでした。

また、日^ひの輝^{かがや}く下^{した}の花^{はな}園^{ぞの}で、花^{はな}びらがなよなよとそよ風^{かぜ}にひらめくを見^みると、たまらなくなつて、彼^{かの}女^{じよ}は、いっしょになつてダンスをしたのであります。

両^{りようしん}親^{しん}は、自分^{じぶん}の娘^{むすめ}をもてあましてしまいました。母^{ははおや}親^{しん}は、ダンスなどというものは、きらいでありましたから、

「もう、これほどまでいつて、それでも聞^きかないで、踊^{おど}りたいなら、おまえは家^{うち}にいないほうがいいから、かつてにゆきたいところへいつて、踊^{おど}りたいだけ、踊^{おど}つたらいい。」と、母^{ははおや}親^{しん}はいいました。

母^{ははおや}親^{しん}は、娘^{むすめ}に裁^{さい}縫^{ほう}を教^{おし}えたり、また行^{ぎやうぎ}儀^ぎを習^{なら}わしたりしたいと思^{おも}つたからです。けれど娘^{むすめ}は、それよりか、自分^{じぶん}かつてに踊^{おど}りたかったのであります。

「お母^{かあ}さん、私^{わたし}は、もつと旅^{たび}へいつて、踊^{おど}りのけいこをいたします。そして、それで身^みをたてたいと思^{おも}いますから、どうぞ、お暇^{ひま}をください。」と頼^{たの}みました。

両親は、いつか、娘が自身で気がつくときがあるであろうと思つて、涙ながらに、それを許しました。

娘は、あるときは、雲の流れる方へ向かつて歩いていきました。また、あるときは、水の流れる方へ向かつて、旅を続けました。そして、白壁や、赤い煉瓦などの見える、気持ちのいい町へ着きました。

彼女は、町の中を歩いていきますと、小さな劇場のようなところがあつて、そこには美しい花の飾りがしてあり、旗などが立ててありました。そして、看板に、「どなたでも、踊りたいと思う人は、踊りなさい。歌いたいと思われる人は、歌いなさい。そのかわり、上手でなければ、人々が笑います。」と、書いてありました。

彼女は、この劇場の前に立つて考えました。

「踊りたいには、踊りたいが、上手に踊れるだろうか？ 下手に踊つて、人々から笑われやしないだろうか？」

しかし、彼女は、べつに頼つていくところのきまつた身でもありませんから、上手、下手はそのときの運命と思つて、とにかく出て踊ることにしました。

彼女は、みんなの前で踊りました。

「草くさの葉はの踊おどり」

「赤あかい花はなのダンス」

こうした、二つの踊おどりは、みんなに不思議ふしぎな感かんじを与あたえました。みんなは、喜よろこびました。拍手はくしゅしました。彼女かのじよは、あたかも、なよなよと草くさの葉はが風かぜにもまれるように、柔やわらかに体を波打なみうたせて踊おどりました。また、真紅まつかさに咲さき乱みだれた花はなが、風かぜに吹ふかれて、いまにも散ちりするようなすを、手てを振り、足あしを動うごかし、体からだをひねって、してみせたのであります。

「なんとというおもしろい踊おどりだろう……。」と、みんなは口々くちぐちにいいはしました。

ここに、金持かねもちのお嬢じようさまがありました。お父とうさんや、お母かあさんは、たくさんのお金かねを残のこして、この世よの中から去さられたので、お嬢じようさまはりっぱな、大おおきな家いえになに不自由ふじゆうなく、独ひとりで暮くらしていられました。

このお嬢じようさまが、ちようど劇場げきじようにきて、娘むすめの踊おどりを見みていられましたが、踊おどりばかりでなく、この娘むすめがたいそう気きにいられました。

「おまえさんは、わたしの家うちへきませんか。」と、お嬢じようさまは、踊おどりが終おえると、娘むすめにあつて話はなされました。娘むすめはお嬢じようさまに向むかつて、

「私は、ただ踊おどりたいのです。私わたしを自由じゆうに踊おどらせてくださればまいります。」といいまし

た。

「わたしは、おまえさんから、その踊りを習いたいのですから、そんな、気兼ねはすこしもいりません。」と、お嬢さまは答えられました。

娘は、その日から、お嬢さまの家へ住むことになりました。

お嬢さまの家は、りっぱなお家でした。そして、青い着物をきた、もう一人美しい娘がいました。その娘は、いい声で一日唄を歌っているのです。

「この娘さんは、おまえさんと異つて歌うことが好きなんです。それで、こうして、好きな唄をうたっているのですよ。おまえさんは、今日からかつてに、この家で踊りなさがいい。」と、お嬢さまは、いわれました。

娘は、自由なところだと思いました。そして、はじめて、長い間の望みがかなったように思いました。いい声で、歌っていた少女は、ぶどうのような、うるんだ目でじつと、新しく、ここへきた娘を見ながら、

「あなたは、草の葉や、赤い花から、踊りを教わったとお姉さまから聞きましたが、私は、また唄を小鳥から、あのみみずから……風から、いろいろなものから習いましたの。私は、青い着物を着て、こうして歌っていると、ちょうど自分が小鳥のような気がして、それは、

うれしいんですよ……。」

青い着物の少女が、お嬢さまを姉さんといっていますので、彼女もまた、お嬢さまのことを姉さんということにしました。

この唄を歌うことの好きな少女は、やはり自分の家にいる時分、朝晩、歌っていましたので、唄をきらいな、気むずかしいお父さんは、娘をしかって、どこへでもいいってしまえといいました。それで少女は、泣く泣く家を出て、やはり、この町にやってきました。そして、劇場の前を通りますと、

「歌いたいのものは、だれでも、はいって遠慮なくうたいなさい。まずければ、人に笑われます。」と、このときも、看板に書いてありました。

少女は、こずえに止まって、小鳥が自由にさえずるときの姿を思い出しました。また、夏の晩方、眠そうに、唄を歌っているみみずの節を思い出しました。それが、みんなの喝采を博しました。このときも、お嬢さまは、ここにきていて、この少女の唄を聞かれました。そして、少女をお家へつれて帰られたのでした。

「花の踊りには、赤い着物を着るといい。」と、お嬢さまは言って、この踊りの好きな娘には、美しい花弁のような着物を、造ってくださいました。

その日から、家の中で、青い着物の少女はうたい、赤い着物の娘は、花卉の風に吹かれ狂うごとく踊るのでありました。

ある日のことです。りっぱな、お嬢さまの馬車が門の前に止まると、お嬢さまは、黒髪を両方のふくよかな肩に乱した、半裸体の若い女をつれて、お家の中へはいられました。

青い着物の少女も、赤い着物の娘も、この怪しげな女を見て、目を円くしてびつくりしていました。

「この人は、魔術使いなのよ。今日から、この家で、いっしよに暮らすことになったの。一と、お嬢さまは、驚いている二人に向かつていわれました。

黒目勝ちな、唇の赤い、眉の濃い、髪の長い女は、黙って、二人に向かつて頭を下げました。魔術使いの女は、おしなのでした。

「おまえさんには、黒い着物がよく似合うようだ。」といって、お嬢さまは、魔術使いの女には、黒い着物をさせました。

その女は、なんでも、魔術をインド人から教わったということです。人間をはとにしたり、からすにしたり、また、はとを皿にしたり、りんごにしたりする不思議な術を知

っていました。いままで、いい声で歌っていた青い着物の娘が、魔術にかかってからす
 になつたり、いままで赤い着物をきて踊っていた娘が、たちまちの間にはとになるかと思
 うと、美しい、華やかな着物をきて、笑つて、それをばごらんになつていたお嬢さままで
 が、どこへか姿が消えてしまつたり、最後に、魔術使い自身も、白い煙をたててなくな
 ってしまったかと思つたり、目の前へ一本の草が芽を出し、それがすぐ大きくなつて
 花が咲き、その中から人間が生まれる——それが、お嬢さまであつたり、また、はとが、
 生まれかわつて箱の中から出るときは、いつのまにか、赤い着物をきた娘になつたりする
 ような、それは不思議なことばかりでありました。

「もつとおもしろいなにか芸をする娘さんたちが、集まつてこないものかね。」と、お嬢
 さまは、その後も劇場へいつてみられたけれど、それから出た女は、平凡なものば
 かりでした。

「お姉さま、きつと旅に出たらおもしろいことがあると思います。」と、青い着物をきた
 少女がいました。

「わたしも、そんなことを思っていたのよ。もうこの町の生活にも飽きましたから、四
 人が旅へ出て、ゆくさきぎさきの劇場で、私たちの芸をしてみせたら、かえつておもし

ろいかもしれない。」と、お嬢さまはいわれました。

そこで、四人は、旅へ出たのであります。そして、ゆくさきぎぎでいろいろの芸をしてみました。四人の年若い女たちは、いずれも美しい顔で、見る人々をうつとりとさせました。中でも男たちは、かつて、こんなに美しい女を見たことがないといつて、感歎しました。そして、まれには、結婚を申し込んでくるものもありましたけれど、四人は、けつして、それらの人たちには、取り合いませんでした。魔術使いの女はおしではありましたが、顔のどこかに、いちばん多く人を魅する力をもっていました。

夏のはじめになると、北国の海は青々として冴えていました。彼女らは、この海岸の小さな町にはいつてきて、その劇場で踊ったり、歌ったり、また魔術を使ったりしてみせました。まだまったく開けていない土地の人々だけに、どんなに驚いた目つきをして、この美しい女たちをながめたであります。

「真つ赤な着物をきて、花のように踊る。」といつて、喜びました。

「あの黒い着物をきた女は、なんというすごいほど美しい女だろう。そして、魔術を使う。」といつて、驚いてうわさをしました。

また、町の男も、女も、美しいお嬢さまについて、また、風のあたる緑の林を思わせる

ような、唄を上手に歌う少女について、いろいろの評判をしました。そのうちに、彼女らは、この小さな北国の町にも別れを告げて、遠い西の国を指して、旅立たなければならぬ日がきました。

彼女らの、この町を去ってしまうということは、楽しみと色彩に乏しいこのあたりの人々に、なんとなくさびしいことに感じられたのであります。そこで、いよいよその日がくると、若者たちは、外に出て彼女らの立つのを見送っていました。

四人の美しい女たちは、赤い馬車に乗りました。赤い馬車は、青い海を左手にながめながら、海岸を走っていったのであります。

初夏の光に照らされて、その赤い馬車は、いつそう鮮やかに、色が冴えて見られました。そして、青い海の色と反映して、美しかったのでした。馬車は走って、走っていきましました。海岸の道は、しだいにけわしくなりました。

一方は山で、切り落としになった、一方は深い深い崖であります。その崖の下には、大きな波が打ち寄せていました。

赤い馬車は、どう誤ったものか、勢いよく走ってゆくと、その崖からまっさかさまに海の中へと四人の女たちを乗せたまま落ちてしまいました。そして、いままで、赤く火の燃

えついたように、走つていった馬車の影は、もはや、どこにも見えませんでした。太陽は、そのことを知つてか、もしくは知らずにか、すこしの変わりもなく、白い道を照らし、青い海の面を照らしていました。

たまたま、馬車が崖から落ちたのを見ていたものがあつて、大騒ぎになりました。人々はそこへいつてみました。けれど、馬も、人も、また赤い箱も、なにひとつ名残をとどめていないので、みんなはそのことをはなはだ不思議に思いました。

「魔術使いの乗っている馬車だから、どんな魔術を使つて、姿を消したのかもしれない。」といったものもありました。

その後、この話は、この海岸の不思議な話となりました。

暗い晩に、北国の海を航海する船が、たまたまこのあたりを通りますと、どこからともなく、若い女の歌う声が、聞こえてくることがあるといいました。また、ある漁船は、夜、雨の降る中をさびしくこいでいると、あちから一そうの小舟がやってきて、音もなくすれちがう。その舟の中には、赤い着物をきた女がただ一人すわつて、泣いているのを見たというものもありました。

毎年、初夏のころのことです。この海岸に、蜃気楼が浮かびます。赤い

着物きものをきた女おんなが踊り、青あおい着物きものをきた女おんなや、黒くろいからすの影かげなどが、空そらに見みえるかと思おもう
 と、しばらくして、消きえてしまい、晴はれわたった、輝かがかしい太たい陽ようの下したで、顔かおも形かたちも見みえ
 ないで、女おんなの笑わらう声こえがきこえる……。こんな神しん秘び的てきな現げん象しょうをこの海かい岸がんの人ひと々びとは、
 いままで幾いくたびも見みたり、聞きいたりしたということであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

底本の親本：「未明童話集1」丸善

1927（昭和2）年1月5日発行

初出：「童話」

1925（大正14）年5月

※表題は底本では、「初夏《はつなつ》の空《そら》で笑《わら》う女《おんな》」となっています。

※初出時の表題は「初夏の空で笑ふ女」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：へくしん

2019年6月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

初夏の空で笑う女

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>